



# 畢竟 (ひっきょう)

永田円了

The Bottom Line is...

コトバというものは、頭の中の何にもないところから、少しずつ輪郭をつくって外界へ表出させる道具である。これは義理だ、とえば、世の中の避けては通れない部分を表し、人情だと言え、何か温かい念の塊を創出する。

今回のテーマ「畢竟 (ひっきょう)」は、コトバとしては少々古典的な響きがあるが、それ故に逆に新鮮で迫力を感じる。「畢竟」とは、究極、最終、詰まるところ、本質は、と迫る語彙である。このコトバを使うことによって、物事の本質を絞り込み、根本的に何が一番大事なことなのかをズバリと目の前に放り投げるのである。

## 夏目漱石『こころ』より

「畢竟」という語彙は、文豪・夏目漱石も好んで使った。文庫発行部数第一位、673万部売れたという小説『こころ』の中では、7回使用されている。

「そうしてそれを食うときに、**畢竟**このお菓子をくれた二人の男女は、幸福な一対として世の中に存在しているのだと自覚しつつ味わった (P.60)。「**畢竟**やくざだから遊んでいるのだと、結論しているらしかった (P.122)」など。

「悪い人間という一種の人間が世の中にあると君は思っているのですか。そんな鑄型に入れたような悪人はこの世の中にあるはずがありませんよ。平生はみんな善人なんです。少なくとも普通の人間なんです。それが、いざという間に、急に悪人になるんだから恐ろしいのです。だから油断ができないんです」。これは、先生が「私」に語るシーン。これを突き詰めて短く表すなら、「人間というものは、**畢竟**、善悪具有の生きものだ」となる。

また、先生が後半で「私」に告白する場面がある。「死ぬ前にたった一人でもいいから、他(ひと)を信用して死にたいと思っている。あなたはそのたった一人になれますか。なつてくれますか。あなたは腹の底から真面目ですか」。先生のその時の気持ちを突き詰めて言うなら、「**畢竟**、人間は一人でもいいから、自分のすべてを分かってくれる人を必要としている」と、人間の本質をズバリと表現することができる。また、漱石のいう「真面目」とは、**畢竟**、精神的に向上心があること、という定義も特筆すべきことである。



## 最期のディナーを召し上げれ

クローズアップ現代 (2013/5/22) で、「人生のディナーを召し上げれ」が放映された。人は人生の最期に何を食したいと願うのか。膵臓ガン末期の K さんは、パッテラをリクエストした。戦中戦後の食糧難の時代、K さんにとってパッテラ (鯖寿司) は、一日の終わりに幸せなひとときを与えてくれた唯一のものであったという。

また、食道ガンを患う N さんは、最期にすき焼きが食べたいと願った。奥さんと一緒に鍋をつつきたかったのである。この二人の思いを「**畢竟**」というコトバで創出すると、K さんの場合は、『**畢竟**ひとは自分の人生をシェアしてくれる人を必要とするのだ』。また、N さんの場合は、『人は、**畢竟**誰かと一緒に食事がしたい』ということになる。

**畢竟、人間は自分のためだけに生きて、自分のためだけに死ねるほど強くない** (三島由紀夫)

Happiness is only real when shared.

<事例 DVD>

夏目漱石著『こころ』大正3年(1914年)出版

映画『こころ』市川崑監督、1955年日活

エドガー・アラン・ポー作 『William Wilson』自分の分身を殺す

クローズアップ現代『人生のディナー』2013/5/22

映画『Into The Wild』2007年 米映画

歌・You've got a friend Carol King & James Taylor



円了のホームページ: [www.enryo.jp](http://www.enryo.jp)